

## 具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜（２）

近藤 健二

今からおよそ1万年前まで、アジア大陸北東端とアラスカとはつながっていた。今日の日本列島も、その大部分がアジア大陸と一体であった。また、今のインドネシア、ブルネイ、フィリピンなどの領域がマレーシア半島と一緒にあって大陸を形成し、これがさらに約8千年前まではオーストラリア大陸とつながっていたという。

環太平洋地域がこのように地続きであったことは、これらの地域で話される諸言語が多少とも似通っていることと無縁ではない。アジア太平洋諸語は、何万年か昔に、おそらくアジア大陸で狩猟採集生活を営んでいた人々の言語に根ざしたものであろう。狩猟採集民は獲物を追って、今は海によって隔てられている地域にまで拡散した。こうして、もとは一つの言語であったものが散り散りに分かれていったものと思われる。

筆者の考えでは、このように分裂して生じた言語の中に、南洋諸島を中心に分布するオーストロネシア語族、ニューギニア島にその大部分が集中するパプア諸語、オーストラリアの原住民諸語なども含まれる。これら南方の諸言語は、実際、北方のアイヌ語やエスキモー語などと歴史の深淵においてつながっている。本稿では、そのように判断する根拠を、具格接辞を中心とする格標識と人称代名詞あるいは動詞人称接辞との関係性を論じることによって示そうとする。

### 1 オーストロネシア語族

オーストロネシア語族は、一般に西部語派と東部語派に大別される。前者にはマレーシア、インドネシア、フィリピンなどの領域に分布する言語が含まれる。マダガスカルのマラガシ語、台湾の高砂族諸語もこの語派に属する。一方、東部語派にはメラネシア、ポリネシア、ミクロネシアなどの言語が含まれる。ハワイ諸島のハワイ語、イースター島のラパヌイ語などもこの語派に属する。以下では、これらの中からいくつかの言語を取りあげ、その人称代名詞の成り立ちを考える。

#### 1.1 ヤミ語

ヤミ語は、台湾本島の東南海上にある蘭嶼に住むヤミ族の言語である。ヤミ族は他の高砂族と同様に、フィリピン方面から渡来した人々の子孫であると考えられる。あるいは反対かもしれない。プラスト(1998)によれば、オーストロネシア語族の原郷は台湾である。すなわち、もともとは台湾に住んでいた人々がアウトリガーカヌーに乗って南

太平洋の地域に広がっていったという。いずれにせよ、ヤミ語がフィリピン諸語と非常によく似ているのは、これらの言語を話す人々がもとは同一民族であったことによる。以下に、ヤミ語の人称代名詞を表にして示してみよう。

<表1> ヤミ語の人称代名詞<sup>1</sup>

		視点		属格・具格・主格	所格
		一般形	強調形		
単数	1人称	ko	yaken (y)ako	ko	jaken
	2人称	ka	imo	mo	jimo
	3人称	ya		na	ja
複数	1人称包括形	ta(kamo)	yaten	ta(kamo)	jaten
	1人称除外形	kami	yamen	namen	jamen
		namen			
	2人称	kamo	ino	ño	jino
	3人称	sira		da	jira

これらの形態の出自は、アイヌ語やエスキモー語の人称代名詞、あるいはチベット語やビルマ語の人称代名詞の場合と同様、祖語において存在したと想定される格標識 \*-ga、\*-ti、\*-maと結びつけて考えることが可能である。まずkoとkaについて言うと、これらが\*-gaに由来するものであることは疑いを入れない。naも、朝鮮語や上代日本語のnaと同様に、\*-gaが\*nga > \*ŋaを経て生まれた形であろう。ño[no]はnaと同種のものと考えられる。yaは、\*ga > \*nga > \*ŋa > \*nyaという変化を経て生じた形であると推定される。一方、taとdaは\*-tiの、moは\*-maの反映形と見てよかろう。その他の形態の多くは、\*-ga \*-ti \*-maの反映形が組み合わさったもののようである。たとえば3人称複数のsiraは、\*ti > \*ciという変化を経て生まれたsiと\*ga > \*aという変化を経て生まれたraとが合体したものであろう。また、1人称複数除外形のnamenやyamenの-menは、\*-maの反映形meとna(< \*ŋa < \*nga < \*ga)が弱化したnとが合わさったものと見なされる。ちなみに、siraなどの-raは日本語の複数化接辞-raと同源であり、namenなどの-menは中国語における人称代名詞の複数化接辞に通底する形態ではないかと思われる。

ヤミ語の人称代名詞が格標識の\*-ga、\*-ti、\*-maから生じたものであるという考えを裏付けるには、これら格接辞の反映形がヤミ語において格標識としても機能しているという事実を確認しなければならない。そこで、ヤミ語において格関係を表すために用いられる冠詞の組織を下の<表2>に示し、それと\*-ga、\*-ti、\*-maとの間に歴史的なつ

ながりが認められるかどうかを確かめる。

<表 2 > ヤミ語の冠詞<sup>2</sup>

		視点	属格・具格・主格	目的格	所格
一般名詞		o	no	so	do
人名	生者	単数	si	ni	
		複数	sira	nira	jira
	故人	単数	simina	nimina	jimina
		複数	siramina	niramina	jiramina

冠詞の成り立ちを吟味するまえに、冠詞の何たるかについて、特に視点標識と格標識との関係について若干説明しておかなければならない。オーストロネシア語族の冠詞というのはインド・ヨーロッパ語の前置詞のようなものである。ただし、視点標識としての冠詞は別である。視点というのは一般に話題格であるとか主格であるとか言われるが、拙稿(1998、1999)で論じたように、視点とは「発話に際して真っ先に注意が向けられる要素」のことである。このことを、具体例をあげて今一度説明しておこう。

( 1 ) ongimanuma nimtak sira o tao do pongso ta.

昔 出て来る 彼ら(視点) 視点 人 に(所) 島 私たち(属)

am mingiyud sira a tao. o karowa no tao

そして 普通 彼ら(視点) 連結詞 人 視点 第二 の(属) 人

da am ji sira pa mingiyud a tao、

彼ら(主) そして ない(否定) 彼ら(視点) もはや 普通 連結詞 人

ta somaggian sira mina orayin.

なぜなら 馬鹿 視点 ミナ・オライン(人名)

「昔、私たちの島に人々が現れた。彼らは普通の人々であった。第二番目に生まれた人々はもう普通の人ではなかった。なぜなら、彼らミナ・オラインたちは馬鹿だったからである。」(伝説『川の水を飲みほそうとした話』<sup>3</sup>)

( 2 ) am owrio nipiYian da rama. asa da kangay

そして そのとき 村に住む 彼ら(主) すでに かつて 彼ら(主) 行く

do takey o ina na a mavakes. miyatatngam

に(所) 畑 視点 母 彼女(属) と(接続詞) 女 そのとき

mačirer o anak. mañiYin o ina na am ji

一緒に来る 視点 子供 告げる 視点 母 彼女(属) と(接続詞) な(否定)

kangay, ta mabařang o araw.

行く なぜなら 焼けている 視点 太陽

「もうそのとき人々が村に住んでいた。あるとき女とその母親が畑に行った。そのとき子供が一緒に行った。彼女の母は、太陽が焼けているから行くなと言った。」(伝説『2つの太陽の話』)

これらの例は、筆者の言う視点がいわゆる話題(topic)ではないことを例証するためのものである。まず、(1)における冒頭の文に注目してみよう。これは物語の始まりの部分であるから、nimtak sira o taoには「人々が現れた」という訳語をあてるのが自然であろう。敢えて言うまでもないことだが、「が」というのは話題要素には付きそうにない。したがって、問題のsiraとoは話題化のための形態ではないという論が成り立つ。

同じことは(2)における二つ目の文のo ina na a mavakesにもあてはまるし、三つ目の文のo anakにもあてはまる。これらも「女とその母親が」「子供が」というように「が」を用いて訳さなくてはなるまい。さらに、(2)の最後の文は視点と話題が同一の概念ではないことを示す格好の例である。ji kangay, ta mabařang o araw「太陽が焼けているから行くな」においてo araw「太陽が」を話題であると解釈する余地はまったくない。

次に、視点が主格と同一でないことを指摘しなければならないが、このことを例証するのは難しいことではない。以下のように主語でない要素が視点化されている例をあげれば十分だろう。

(3) am owrio nipeykanekenen no tao o alibangbang am  
そして その結果 食べ終わる が(主) 人 視点 飛び魚 そして  
meyngen sira  
病気になる 彼ら(視点)

「飛び魚を人々が食べ終わると、彼らは病気になった。」(伝説『飛び魚漁の話』)

上の例においてalibangbang「飛び魚」を主語と見なす場合、no taoは「人々によって」と解釈され、動詞のnipeykanekenenは「食べ終わられる」と解釈される。しかしnipeykanekenenを受動態と見なす形態上の証拠はない。むしろ語末の-enは動詞を名詞化するための接辞の一つと同形である。この事実から、以下のような推論が導かれる。

拙稿(1998、1999)で指摘したように、o alibangbangはかつては「食べ終わったもの」という意味の動名詞であり、それをno tao「人々の」が修飾していた。つまり全体として、「飛び魚は人々の食べ終わったものである」という意味を表したのである。しかし、名詞化した動詞がふたたび動詞としての意味を取り戻し、主語が目的語に転じた。こうして、全体の意味が「飛び魚を人々が食べ終わった」に変わったのである。

この推論が正しければ、視点という文法カテゴリーは主語という文法カテゴリーから

生まれたものであると言える。しかし、主語であったものが直接に視点になったのではない。主語は、話題化されることが多いので、まず話題となった。そして話題がその機能を拡大させて視点となったのである。視点とは、日本語であれば「な」「ね」「さ」などの助詞を用いて、「その飛び魚をな人々が食べると、彼らはな病気になったんだ」のように表現される要素である。このことは拙稿(1998、1999)ですでに指摘したとおりである。

さて、視点標識なるものがもとは主格標識であったということ、そして今は主格標識であるものがもとは属格標識であったということは、冠詞の成り立ちを考えるうえで非常に重要である。というのも、視点標識の起源を探ることは主格標識の起源を探ることになり、主格標識の起源を探ることは属格標識の起源を探ることになるからである。そこで今、問題を次のように設定することができる。冠詞のoやsiはいかにして主格標識となり、noやniはいかにして属格標識となったのか。

この問いに対して次のように答えることができよう。属格標識noは、属格接辞\*-gaが\*nga > \*ŋa > \*naという変化を経たものであろう。日本語の属格接辞-noも同じ過程を経て成立したものにちがいない。主格標識oは属格接辞\*-gaから具格標識が生まれ、それがさらに主格化したものである。oという形は、\*ga > \*ko > \*ʔo > \*xo > oといった変化によるものであろう。この判断は、ヤミ語のoに相当する形態がたとえばインドネシアのフローレンス島に分布するンガダ語でnga[ŋa]であり、トンガ語でkoであり、サモア語でʔoであるという事実を根拠にしている。人名名詞に付される視点標識siは尊格接辞に由来する具格接辞\*-tiの反映形であろう。大胆な想像をめぐらせば、中国語と日本語の「氏」や「師」などはこのsiと究極的に同源ではないかと思われる。一方、人名名詞に付される属格・具格・主格標識niは、一般名詞の属格・具格・主格標識noとsiに由来するiとが合体したものの縮約形ではないかと思われる。soとdoは\*-tiに由来する\*siと\*diがnoの影響で変形したものかもしれない。その他の形態は、\*-ga、\*-ti、\*-maの反映形が組み合わさったものであると考えられる。

以上の考察から次の結論が得られる。ヤミ語の人称代名詞と冠詞はともに、格標識の\*-ga、\*-ti、\*-maにその起源を求めることができる。したがって、ヤミ語の場合にも人称代名詞は格標識としての冠詞に人称的意味がかぶさって成立したものであると想定される。

## 1.2 コシャエ語

コシャエ語はオーストロネシア語族東部語派に属する核ミクロネシア諸語の一つである。下の<表3>に、その人称代名詞の組織を示す。

<表3> コシャエ語の人称代名詞<sup>4</sup>

		主格	属格	对格
単数	1人称	nga	-k	-yuh
	2人称	kom	-m	-kom
	3人称	el	-el, -ohl	-el
複数	1人称	kuht (包括形)	-sr (包括形)	-kuht (包括形)
		kitačl (除外形)	-ktačl (除外形)	-kitačl (除外形)
	2人称	komtačl	-mtačl	-komtačl
	3人称	eltahl	-ltahl	-eltahl

これらの語形の来歴も \**-ga*、\**-ti*、\**-ma* と結びつけて説明することができる。1人称単数から見ていこう。主格の *nga* [ŋa] は \**-ga* の反映形にちがいない。属格の *-k* は \**-ga* > \**-ka* を経由したものであり、目的格の *-yuh* は \**-ga* > \**-nga* > \**-ŋa* > \**-nya* > \**-ya* という変化を経て生まれた形ではないかと思われる。2人称単数の主格 *kom* と目的格 *-kom* は \**-ga* の反映形と \**-ma* の反映形とが合わさったものであり、対格の *-m* は \**-ma* の反映形であると考えられる。3人称の場合、主格の *el*、属格の *-l*、対格の *-el* はいずれも、\**-ga* > \**-a* > \**-ra* > \**-r* という変化を経由したものであろう。

複数形は \**-ga*、\**-ti*、\**-ma* の反映形が合体したものであろう。さまざまな形態のうち、1人称除外形と2人称の *-tačl* という語尾は \**-ti* の反映形である *-ta* と *-čl* に \**-ga* の反映形である *-l* が付いたものようであるが、これは日本語の複数化接辞 *-tači* に似ている。また3人称の語尾 *-tahl* は、中期朝鮮語の複数化接辞 *-tal*、現代朝鮮語の複数化接辞 *-dwl*、アイヌ語の複数化接辞 *-utar* や *-utara* と形がよく似ている。

さて次に、名詞の格がどのように表されるかを、主格と属格と対格について見ておこう。以下に示すように、コシャエ語でも人名名詞と普通名詞とで格標識が異なる。

<表4> コシャエ語の格標識

	主格	属格	对格	
人名名詞	<i>el</i>	<i>-l</i>	<i>-el, -ohl</i>	
普通名詞				
(4)	Sepe	<i>el</i>	<i>ol-ohl</i>	Sohn
	セベ	主	洗う 対	ジョン
	「セベはジョンを洗った」			
(5)	Sepe	<i>el</i>	<i>ol sife-l</i>	Sohn
	セベ	主	洗う 頭-属	ジョン
	「セベはジョンの頭を洗った」			

(6) Muhtwačn kang ik-n tuhlihk sač  
 女 食べる 魚-属 男 その  
 「女はその男の魚を食べた」

コシャエ語においても格標識と人称代名詞の関係は密接である。上に示した人名名詞の格標識は3人称の人称代名詞と形態的に重なっている。これはしかし、格標識が先にあって、それに人称の意味が乗り移った結果であるというよりも、3人称代名詞が先にあって、それが格標識に発達した結果である可能性が高い。なお、普通名詞の属格接辞-nに関しては、これが属格接辞\*-gaの反映形であること、すなわち\*-ga > \*-nga > \*-ŋa > \*-na > -nという変化を辿ったものであることは明らかである。

このように言うと、次のような疑問が生じよう。属格接辞\*-gaは、たとえば日本語で「わが国(wa-ga kuni)」と言うときのように、修飾語に付されるものであったことを暗黙に想定してきたが、コシャエ語において属格接辞-nが修飾語ではなく被修飾語に付されるのはなぜなのか。ある時期に修飾語と被修飾語と属格接辞の配列が抜本的に変わったことを仮定しなければ、コシャエ語の-nが\*-gaに遡るものであるという説明は成立しない。しかし考えてみれば、文を構成する要素の配列、すなわち語順が変化したことを前提にしなければその来歴を説明できない接辞は-nに限ったものではない。またそれは、コシャエ語の接辞に限ったものでもない。オーストロネシア語族全体が基本的に前置詞(冠詞を含む)によって格関係を標示する言語である。この点は、後置詞(格語尾を含む)によって格関係を標示するアルタイ系諸言語におけるのとは根本的に異なっている。したがって、オーストロネシア語族がアルタイ系諸言語と歴史的につながっていることを検証しようとするのなら、後置詞言語が前置詞言語に変わりうるものであることを示さなければならない。この問題は、チャモ口語の人称代名詞を取りあげる次項において論じるつもりである。

### 1.3 チャモ口語

チャモ口語はミクロネシアのグアム島とマリアナ諸島で使用されているが、ミクロネシアの大方の言語が東部語派に属するのは違ってチャモ口語は西部語派の一員と見なされている。しかし以下の<表5>に示すように、チャモ口語における人称代名詞の組織は西部語派の諸言語におけるのとも大きく異なっている。

チャモ口語の人称代名詞は先に取りあげたヤミ語やコシャエ語の人称代名詞と統語的役割こそ異なるものの、その形態の起源はそれらの言語の場合と基本的に変わらない。たとえば単数能格形について言うと、1人称のhuは具格接辞の\*-gaに遡る。すなわち、\*-gaに由来する\*guのgが摩擦音化してuが生じ、このuが無声音化してxuが生まれ、さらにこのxが声門音化してhuが成立したと考えられる。3人称のhaに関して、そ

<表5> チャモロ語の人称代名詞<sup>5</sup>

		能格	絶対格	属格	強調形
単数	1人称	hu	yoʔ	-hu	guahu
	2人称	un	hao	-mu	hagu
	3人称	ha	gueʔ	-na	guiya
複数	1人称包括形	ta	hit	-ta	hita
	1人称排除形	in	ham	-mami	hami
	2人称	en	hamyo	-miyu	hamyo
	3人称	ma	siha	-ñiha	siha

の成立過程は \*ga > \* a > \*xa > ha であったと見なしてよい。一方、2人称の un は、hu の h が脱落した u と \*-ga が nga > ŋa > na を経て生まれた n とが合体したものか、あるいは \*-ga の反映形である n の単なる延長形であろう。単数能格形以外の形態に関しても、\*-ga、\*-ti、\*-ma に関係づけてその成り立ちを説明することが可能である。

さて、ここで話題を転じよう。ここで、オーストロネシア語族が何ゆえに前置詞言語になったかについて、チャモロ語を引き合いに出しながら、そして語順に関する言語類型学の知見を踏まえながら筆者の考えを述べてみよう。

グリーンバーク(1963)が明らかにしたところによれば、たとえば英語のように目的語(O)が動詞(V)の後に置かれる言語(すなわちVO語)では前置詞が多用され、たとえば日本語のように目的語が動詞の前に置かれる言語(すなわちOV語)では後置詞あるいは格語尾が多用される。後置詞あるいは格語尾の使用とOV語順とが、また前置詞の使用とVO語順とがそれぞれワンセットの関係にあるのは何ゆえかについてグリーンバーク自身は何も語っていないが、筆者はそこに以下に述べるような必然的な理由があると考える。

後置詞あるいは格語尾とOVの語順、そして前置詞とVOの語順はきわめて単純な力によって結びついている。前置詞であれ後置詞であれ、あるいはまた格語尾であれ、語と語の格関係を表すものは関係づけられる二者の中間に位置しようとする。関係づけられるものの間であってこそ、両者の橋渡しを効率的に行うことができるからである。その結果として、以下のような連鎖が必然的に生まれる。

動詞 - 前置詞 - 名詞 (VO語)

名詞 - 後置詞 - 動詞 (OV語)

名詞 - 格語尾 - 動詞 (OV語)

オーストロネシア語族に属する言語がおしなべて前置詞言語であることは、語順にかかわる上記の普遍性に基づいて説明することができる。オーストロネシア語族がその祖



語の段階において前置詞言語に転じたのは、動詞が目的語の前に置かれるようになったからである。このことを具体的に、チャモ口語の例文をあげて論じることしよう。

(7) gaige gue? gi i gima?

いる 彼(絶) に(所) その 家

「彼はその家にいる」

(8) dikike? i patgon

小さい その 子供

「その子供は小さい」

(9) ha hatsa i patgon

彼(能) 持ち上げる その 子供

「彼はその子供を持ち上げた」

(10) si pedro ha hatsa i patgon

冠詞 ペドロ 能 持ち上げる その 子供

「ペドロはその子供を持ち上げた」

(11) h-in-atsa i patgon ni lahi

持ち上げる(被行為者視点) その 子供 その~が(主) 男

「その子供はその男が持ち上げたのだ」

チャモ口語の自動詞文は、(7)のようにVSの語順をとる。名詞か形容詞が述語となる場合にも、(8)のように主語が後置される。一方、他動詞文は(9)と(10)のようにSVOとなるのが通例で、(11)のようにVOSとなるのは被行為者を視点とする特殊な場合である。すなわち、(11)のような被行為者を視点とするVOS構文は元来「その子供はその男の持ち上げたものである」といった意味を表す名詞述語文であった。

それにしても、チャモ口語の自動詞文におけるVSという語順と他動詞文におけるSVOという語順は、それらがどのように成立したかについて説明を要する事柄である。この点に関して筆者は以下のように推定する。

オーストロネシア語族のもっとも古い段階においては、上の(7)のような自動詞文と(8)のような形容詞述語文あるいは名詞述語文しか存在しなかった。(9)や(10)のような他動詞文は、後に自動詞文から派生したものである。すなわちそれは、「具格副詞+自動詞+主語」「能格主語+他動詞+目的語」という変化によって生まれた能格構文である。なお、(10)の例におけるように人名には冠詞のsiが付されるが、このsiは先の<表2>に示したヤミ語の冠詞siと同様に具格接辞\*-tiに由来する能格の冠詞であった。siはヤミ語では能格標識から主格標識になり、さらに視点標識となったが、チャモ口語では単なる人名標識になっている。これはおそらく、人称代名詞の能格形が

能格標識として用いられるようになったからであろう。

上述のようにオーストロネシア語族がかつてはVS構文を主体とする言語であったとして、このVSという語順がそもそも何を反映したものであるかは一考に値する。思うに、VS語順の本質はいわゆる現象文のそれと違わない。現象文とは、知覚したことを知覚した瞬間に言語化しようとする文、たとえば「雨が降ってきた！」とか「魚が死んでいる！」といった文のことである。この種の文は往々にして主語と述語動詞の順序が逆転して、「降ってきた雨が！」とか「死んでいる魚が！」のようになる。このような語順の転倒は、言いたいことを早く言おうとする話し手の心理を反映したものである。したがって、それは日本語だけに見られる特徴ではない。中国語で存在や出現を表す文、すなわち存現文が常にVS語順をとるのは、それが話し手のとっさの知覚を表すことが多いからである。英語でも存在や出現を表す文はごく普通にVSという語順をとるが、これもまた現象文を発するときの心理に根ざしたものにちがいない。オーストロネシア語族のVS語順も、現象文のVSという語順が一般化したものであると考えられる。

オーストロネシア語族に関する考察を終える前に、二つのことを指摘しておきたい。一つは、オーストロネシア祖語の基本語順がVSでなくSVであったなら、オーストロネシア語族はVO語にならなかつたということについてである。もう一つは、チャモロ語の中にOV語の特徴を示す後置詞が存在するという点についてである。

第一点目は疑問の余地がないほど明白な事実である。オーストロネシア語族の他動詞目的語は、上述の想定が正しければ、自動詞文主語から生まれたからである。仮に自動詞文がSVという語順であったなら、他動詞文はOVという語順になつたはずである。

第二点目は、チャモロ語の次のような表現にかかわっている。

- (12) i      díkike?    na    patgon  
           その 小さい 属 子供  
           「その小さな子供」

この例に見られるようにdíkike?「小さい」という語に属格標識あるいは連体標識のnaが付されるのは、この語が純然たる形容詞でないことを示唆している。そしてこのnaは、日本語のいわゆる形容動詞と一部の形容詞の連体形を彷彿させる。しかしここでの問題は、属格接辞 \*-ga に由来するnaが後置詞として機能していることである。たとえばヤミ語における属格標識noが前置詞として機能するのは対照的である。またこれは、同じチャモロ語においてniが次のように関係詞として機能するのも対照的である。

- (13) ni    patgon    ni      hu      guaiya  
           その 子供    関係詞   私(能)   愛する  
           「私が愛する子供」

関係詞の ni は、先の(11)の例における ni「その～が」と同源であろう。すなわち、チャモロ語の ni はおそらく属格標識としての前置詞 na に指示代名詞の i が結合して生まれたものである。ni は、このような出自を有するがゆえに、上に示したような関係詞としての機能を獲得したのである。

この問題について筆者が特に強調しておきたいのは、同じ \*-ga に由来する属格標識がある言語で前置詞として用いられ、別の言語で後置詞として用いられるということである。チャモロ語においては、前置詞としての na と後置詞としての na がある時期に共存していた可能性さえある。現にタガログ語では、\*-ga の反映形である -na (母音の後では -ng) がたとえば maganda-ng babae「美しい女」のごとく修飾語に付属したり、babai-ng maganda「美しい女」のごとく被修飾語に付属したりする。このことは、後置詞言語が前置詞言語に変わりうるものであることを如実に物語っている。

## 2 パプア諸語

パプア諸語はニューギニア島を中心に分布する諸言語の総称で、オーストロネシア民族がその周辺地域に渡来するよりもはるか以前、すなわち今から少なくとも4万年前に東南アジア方面から陸路で移動してきた人々の言語を受け継いだものだとされている。パプア諸語の数はワーム(1982)によれば741言語にのぼるといえるが、これらが一つの語族を構成するかどうか、あるいはこれらがいくつの語族に分けられるかについて、まだ明らかにされていない。しかし、これらが系統的にばらばらのものであるとは思われない。歴史的には一つの言語、あるいは同族のいくつかの言語が各地に拡散し、拡散したものが閉ざされた環境の中で独自の変化を遂げ、多数の言語に分裂したのであろう。

### 2.1 人称標識

ワーム(1982)によると、パプア諸語の人称代名詞は大体において以下の<表6>に示す三つの型のいずれかを有するという。

<表6> パプア諸語の人称代名詞の型

		単数	複数	
型	}	1人称	n	n
		2人称	k ~ g ~ ŋg	k ~ g ~ ŋg ~ ŋ, t ~ d ~ r ~ s ~ y
		3人称	y ~ t ~ d ~ r ~ l ~ s, Vk(~ g ~ k ~ ŋ)	
型	}	1人称	k ~ g ~ ŋg ~ ŋ	m ~ p
		2人称	m	m ~ p
		3人称	b ~ p ~ w, ŋ	

型	{	1 人称    t ~ d ~ y (~ s)	(V) {	{	k	} ~ (V) {	{	t
		2 人称    n ~ ñ			g			y
		3 人称    n			(g)			(s)
			nV	{	(k)			

これは、人称代名詞を、そこに含まれる子音を基準にして分類したものである。分類された三つの型を見て気づくのは、たとえばnが型では1人称の、型では3人称の標識であったり、k ~ g ~ ŋg ~ ŋが型では2人称の、型では1人称の標識であったりすることである。また、nがたとえばヤミ語の3人称単数属格・具格・主格代名詞naの語頭子音と同じであったり、kが同じヤミ語の1人称単数属格・具格・主格代名詞koの語頭音と同じであったりすることも注目を引く。そこで、次の考えが浮かぶ。パプア諸語の人称代名詞を母音まで含めて調べてみたら、それらとオーストロネシア語族の人称代名詞との間に著しい類似性が見いだされるかもしれない。そして、パプア諸語とオーストロネシア語族とが系統的につながっているという判断が導かれるかもしれない。

フォーリー (1986) は、ワーム (1975) が東部ニューギニア高地言語系に属するとしている5言語、すなわちフォーリー自身の分類ではゴロカン語族を構成する5言語についてその人称代名詞を以下の<表7>のようにまとめている。なお、単数形と複数形のほかに双数形も存在するが、フォーリーはそれを示していない。

<表7> ゴロカン語族の人称代名詞

		ゲンデ語	シアネ語	ベナベナ語	カマノ・ヤガリア語	フォレ語	
単数	{	1 人称	na	na(mo)	na(ni)	na(gaya)	na(e)
		2 人称	ka	ka(mo)	ka(i)	ka(gaya)	ka(e)
		3 人称	ya	a(mo)	a(i)	a(gaya)	a(e)
複数形	{	1 人称	ta(ri)	la(mo)	la(li)	ta(gaya)	ta(e)
		2 人称	ta	ina(te)	len(ali)	tapa(gaya)	ti(ge)
		3 人称	ya	a(mo)	en(ali)	apa(gaya)	i(ge)

この表は、ヤミ語の人称代名詞を示した<表1>と比較されねばならない。両者を比べたとき、ゴロカン語族とヤミ語との同系性、したがってパプア諸語とオーストロネシア語族との同系性を認めないわけにはいなくなる。人称代名詞の形態が両者の間で非常によく似ていることが知られるからである。単数形の場合、1人称のna(<\*ŋa <\*nga <\*ga)はヤミ語の1人称ko(<\*ga)よりも<表3>に示したコシャエ語の1人称nga[ŋa]に近いけれども、2人称のka(<\*ga)と3人称のya(<\*nya <\*ŋa <\*nga <\*ga)はヤミ語の2人称ka、3人称yaと完全に同形である。複数形に関しても、ゲンデ語とカマノ・ヤガリア語とフォレ語の1人称taはヤミ語の1人称包括形taと同形であり、また<表4>に示したようにチャモ口語の1人称包括形taとも同形である。

ところでフォーリー(1986:277)は、東部ニューギニア高地祖語に1人称複数形の\*taを認めながらも、本来の1人称複数形は\*niであったとしている。そして、\*taをオーストロネシア語族からの借入語であると見なしている。しかし筆者は、そのような主張にくみしない。本来は\*niが1人称複数形であったという考えも、オーストロネシア語族から\*taが借用されたという考えも、根拠が薄弱である。東部ニューギニア高地言語系のたとえばフォレ語に-ta?saという具格接辞、すなわち、-ta?( < \*-ti)と-sa(\*-si < \*-či < \*-ti)とが合わさった具格接辞が存在することを考慮すれば、フォレ語などにおける1人称複数形taは具格接辞\*-tiの反映形と見なすのが妥当であろう。

なお、<表6>において括弧内に示した形態、すなわちゲンデ語の-ri、シアネ語の-moと-te、ベナベナ語の-niや-i、カマノ・ヤガリア語の-gaya、フォレ語の-eと-geは、具格接辞\*-ga、\*-ti、\*-maに由来する能格接辞がその本来の機能を失ったものではないかと思われる。すなわち、本来は能格接辞として他動詞文主語に付属していた形態が主語以外の機能を果たす場合にも用いられるようになったものと推測される。このように格標識が人称代名詞の一部に組み込まれる現象は、パプア諸語だけに特有のものではない。たとえば、チベット系言語の一つであるツオナー・モンバ語(麻<sup>マ</sup>マ<sup>マ</sup>方言)はŋai-teという1人称単数能格形を有するが、この語形は能格接辞が本来の意味を失って生じた形である。すなわちŋai-teは、具格接辞\*-gaに由来する1人称単数形ŋaが能格的意味を失ったため、それに-i(< \*-ti)という能格接辞が付加され、さらにこの-iも能格的意味を失ったため、ŋaiに-te(< \*-ti)という能格接辞が付されたものであると考えられる。この種の現象は日本語や朝鮮語にも見いだされる。かつての日本語で「わっちが」という形態が1人称代名詞として「わっちがの家」のように用いられたが、これは「が」の格標識としての機能が失われたためである。同様に朝鮮語ではkuđe「そなた」という語が雅語としてkuđe-ga「そなたが」のように用いられるが、これはku「あなた」に付された-de(< \*-te < \*-ti)の本来の意味が忘れられたからである。

さて、人称にかかわる情報は人称代名詞によってのみ伝えられるわけではない。パプア諸語では、行為者と被行為者の人称が動詞接辞としても表される。ゴロカン語族では動詞接頭辞が被行為者を、動詞接尾辞が行為者を標示する。フォーリー(1986)に従って、ゴロカン語族の中のフォレ語の動詞人称接辞を以下の<表8>に示す。

この表から分かるように、フォレ語の被行為者動詞接辞は人称代名詞と形態的に酷似している。単数のna-とka-が\*-gaの反映形であり、複数のta-が\*-tiの反映形であることは言うまでもない。行為者動詞接辞も\*-gaと\*-tiの反映形であろう。すなわち、1人称単数と2人称複数の-eはおそらく\*-ga > \*-ka > \*-ke > -eという変化を経たものであり、双数の-seはおそらく\*-ti > \*-či > \*-si > -seという変化を経たものである。一方、3人

<表8> フォレ語の動詞人称接辞

		単数	双数	複数
行為者	1人称	-e	-se	-ne
	2人称	-ne	-se	-e
	3人称	-e	-se	-e
被行為者	1人称	na-	∅	ta-
	2人称	ka-	∅	∅
	3人称	a-	∅	∅

称単数と複数の-eは\*-gaと\*-tiのいずれに遡るか不明である。不明であるというこの判断は、フォレ語と同じ東部ニューギニア高地言語系のアワ語における行為者動詞接辞が以下の<表9>のようなパラダイムを有することに依拠している。

<表9> アワ語の行為者動詞接辞<sup>6</sup>

	単数	双数	複数
1人称	-ga ~ -?	-ya ~ -ya?	-na ~ -na?
2人称	-na ~ -na?		-wa ~ ?
3人称	-de ~ -?		

アワ語の1人称単数行為者接辞-gaはまさしく\*-gaの後裔であり、-?は\*-ga > \*-a > \*-ra > \*?a > ?という変化を経たものであろう。2人称単数と1人称複数の-na ~ -na?は\*-ga > \*-nga > \*-ŋa > na > -na?、双数の-ya ~ -ya?は\*-ga > \*-nga > \*-ŋa > \*-nya > -ya > -ya?という変化によるものであろう。また、2人称複数と3人称複数の-wa ~ ?は\*-ga > \*-a > \*?aという変化を経由したものではないかと思われる。一方、3人称単数の-deは\*-ti > \*-di > -deという変化をたどったものにちがいないが、同じ3人称単数の?は-deが弱化したものと見なすべきか、それとも\*-gaの反映形と見なすべきかわからない。

ところで、上の<表8>と<表9>には\*-gaと\*-tiの反映形しか見られないが、パプア諸語の中には動詞人称接辞に\*-maの反映形を含む言語も存在する。たとえば下の<表10>に示すように、東部ニューギニア高地言語系のエンガ語には\*-maを継承した明白な行為者動詞接辞が存在する。

<表10> エンガ語の行為者動詞接辞<sup>7</sup>

	単数	複数
1人称	-o	-(a)ma
2人称	-e	-(a)mi
3人称	-a	

したがって、パプア諸語の動詞人称接辞も、人称代名詞の場合と同様、格標識の \*-ga、\*-ti、\*-ma から生まれたものであると言えよう。

## 2.2 格標識

パプア諸語の人称標識が格標識、とりわけ具格接辞から成ったものであるとするなら、そしてパプア諸語がオーストロネシア語族やアルタイ諸語と究極的に同じ系統の言語であるとするなら、パプア諸語の格標識、とりわけ具格接辞は \*-ga、\*-ti、\*-ma と深くかかわっていることが予想される。そしてこのことが事実であると証明されれば、それは逆に、パプア諸語がオーストロネシア語族やアルタイ諸語と同系であるという主張の強力な裏付けとなる。また、パプア諸語の人称標識が \*-ga、\*-ti、\*-ma から成ったという主張を一層強固に裏付けることになる。

さて、パプア諸語の格標識は言語によってばらばらである。異なる言語間で格標識が異なるのはあたりまえのことではあるが、フォーリー(1986:100-101)から引いた以下の<表11>と<表12>はパプア諸語の同系性を疑わせるほどの様相を呈している。

<表11> パプア諸語のA型格組織

	イマス語	イアトムル語	ダニ語	フォレ語	ケワ語
具格	} -in ~ -nan	} -mpa	} -nen	} -ta? + sa	} -mé
原因格					
奪格					
所格					
向格		-(ŋk)ət	-ma	-ti、-ta?、-piN	-para
				-ti	

<表12> パプア諸語のB型格組織

	カテ語	セレペット語	クニマイパ語
具格	-zi	-ŋe	-nanga
奪格	-o-nek	-ɔn-gebo	-hananga
所格	-o	-ɔn	-ha
向格	-o-pek	-ɔn-gen	-ti

この二つの表には、フォーリーの言う中核的格関係 (core case relations) と周辺の格関係 (peripheral case relations) のうち、後者の格関係を表す形態が示されている。中核的格関係とは要するに主語や目的語の機能を表す格関係であり、名詞のレベルでは一般にゼロ形態によって表される。あるいは、ダニ語のような能格言語では能格主語に具格があてられる。一方、周辺の確関係とは道具や原因、起点や場所、目標や到達点を表す格関係であり、<表11>では具格・原因格・奪格・所格・向格の5種類が、<表12>

では具格・奪格・所格・向格の4種類が「周辺の格」として認められている。

<表11>と<表12>の格組織の違いについて若干付言しておきたい。<表12>の言語には、見てのとおり原因格が存在しない。これらの言語では、他言語でなら原因格を用いて原因として表現される意味が主格あるいは能格を用いて行為者として表現される。つまり、「風で木が倒れた」のようにではなく、「風が木を倒した」のように表されるのである。この点は、<表11>のフォレ語に関しても同じである。したがってフォレ語の格組織は、原因格が存在しないという点においては<表12>の言語と同類である。筆者が便宜的にA型と呼ぶ<表11>の格組織は同一の形態が複数の格を兼ねている格組織であり、<表12>のB型組織は一つの形態と一つの格とが一對一に対応している各組織である。

話を本題に戻そう。今ここで求められていることはパプア諸語における格標識の成り立ちを探ることである。上の二つの表に示された諸形態は\*-ga、\*-ti、\*-maから成ったものであろうか。答えはしかりである。<表11>におけるイマス語の-inは\*-tiに由来する-iと\*-gaに由来する-n(\*-na<\*-ŋa<\*-nga<\*-ga)か\*-maに由来する-n(\*-m<\*-ma)との組み合わせ、-nanは\*-gaの反映形である-naと\*-gaか\*-maに由来する-nとの組み合わせであろう。イアトムル語の-mpaは\*-maの反映形、(ŋk)ɔtは-ŋkə(<\*-nga<\*-ga)に-t(<\*-ti)が付加されたものと考えられる。ダニ語における-nenはイマス語の-nanと同じ過程を経たものか、あるいは-na(<\*-ŋa<\*-nga<\*-ga)と-i(<\*-ti)とが合わさった\*-naiが\*-neとなり、これに\*-gaか\*-maの反映形-nが付いたものかもしれない。所格・向格接辞の-maはまさに\*-maの後裔である。この-maはビルマ語の所格・時格接辞-hmaあるいは-maと比較されるべきである。次にフォレ語の-ta? + sa、すなわち-ta?saは、すでに述べたように\*-tiの反映形である-ta?と-saとが合体したものにちがいない。奪格の-tiは奪格接辞\*-tiをそのまま受け継いだ形であり、所格と向格の-tiは奪格の機能が拡大して生じたものである。ちなみに、奪格から向格への機能拡大は満州語の一方言であるシベ語の-či(<\*-ti)にも観察される。<sup>8</sup>フォレ語の-piNとケワ語の-paraには\*-maがからんでいるように思われる。-piNの前身は\*-mpinであり、この\*-mpinの前身は\*-minであったと推定する。そしてこの-minは、\*-maと\*-tiと\*-gaの反映形の組み合わせたものであると推定する。-paraの前身は\*-mprā、そのまた前身は\*-maraであったろう。そしてこの\*-maraは\*-maと\*-ra(<\*-a<\*-ga)とが合体したものであったと想定される。ケワ語の-meは単に\*-maの反映形か、あるいは\*-maに\*-tiの反映形-iが付加された\*-maiの変形したものであるかもしれない。aiという二重母音は、日本語の1人称代名詞「わたい(watai)」が「わて(wate)」に転じたように、eという音に容易に変化するものであることを指摘しておきたい。



<表 12 > にも、\*-ga、\*-ti、\*-ma から成ったと判断される形態がいくつも存在する。カテ語の具格接辞 -zi は \*-ti の反映形であろう。セレペット語の具格接辞 -ŋe は \*-ga > \*-nga > \*-ŋa という変化を経たものがさらに弱化した形であるか、\*-ga の反映形 \*-ŋa と \*-ti の反映形 -i とが合わさった \*-ŋai の変形したものである。クニマイバ語の具格接辞 -nanga は \*-ga の反映形を二つ重ねた -nan に対してさらに -ga を添えたものであろう。なお、クニマイバ語の尊格接辞 -hananga は \*-ga の反映形 -ha ( \*-xa < \*-ʔa < \*- a < \*-ga ) に具格接辞の -nanga が付加された形であると見なされる。

以上のようにパプア諸語の格標識が \*-ga、\*-ti、\*-ma を継承したものであることはほとんど疑いを入れないように思われるが、もう一つ、パプア諸語がアジア太平洋諸語の中で系統的に孤立した言語群でないことを示す決定的な証拠を提示するために以下の例をあげる。

- (14) イマス語 : ama-na-n            apwi  
    私-属-    c 単            父 ( ・単 )  
    「私の父」
- アランブラク語 : nan-ho            wurat  
    私-属            足  
    「私の足」
- エンガ語 : namba-nya            mena  
    私-属            豚  
    「私の豚」

これらの例における属格接辞はいずれも属格接辞 \*-ga の反映形にちがいない。すなわち、-na は \*-ga > \*-nga > \*-ŋa > -na という変化、-ho は \*-ga > \*- a > \*-xa > \*-ha > -ho といった変化、-nya は \*-ga > \*-nga > \*-ŋa > -nya という変化をたどったものであろう。このようにパプア諸語の属格接辞が \*-ga に逆するという事実は、パプア諸語がオーストロネシア語族やアルタイ系諸語と同じ源流から発した言語であることを裏付ける動かし難い証拠となる。ところで、パプア諸語の属格形は常に属格接辞を付けることによって形成されるわけではない。実際、人称代名詞の属格形すなわち所有代名詞は、時として属格接辞を有しない。つまり、語幹と語尾とに分割できないということである。たとえばクマン語では、bi-na 「私の頭」というときの -na 「私の」、あるいは namb-ra 「私の額」と言うときの -ra 「私の」といった形態が所有代名詞として用いられる。そしてこれらの形態は、注目すべきことに、上の (14) に例示した属格接辞と非常に似通っている。パプア諸語の人称標識もまた格標識から成り立ったものであると筆者が確信するのは、そのような類似性を前提にしてのことである。

### 2.3 イマス語の動詞・形容詞人称接辞

パプア諸語の人称標識も格標識から成ったものであると断じたばかりであるが、この主張はイマス語における動詞・形容詞人称接辞と格標識との関係を調べることによって検証されなければならない。というのも、イマス語では動詞・形容詞人称接辞の形態、正確に言うと、無生名詞の主語あるいは目的語を投影する動詞人称接辞の形態、および無生名詞を修飾する形容詞などに付される人称接辞の形態がその無生名詞の語尾とかなりの程度に一致するからである。そこで、人称標識の起源があくまで格標識にあると言うのなら、格標識と無生名詞の語尾との間にどのような必然的關係があるかについて明らかにする必要がある。しかしこの問題に関する議論は、とりあえず、主語・目的語と述語動詞との間の呼応 (concord) という文法事象、および名詞とそれを修飾する形容詞などとの間の一致 (agreement) という文法事象がイマス語においてどのようなものであるかを説くことから始めなければならない。

まず、自動詞文における主語と述語動詞との呼応関係、および他動詞文における主語・目的語と述語動詞との呼応関係をフォーリー (1986) に準拠しながら説明する。

(15) namarawt na-pu-t

男 (・単) ・単-行く-完了

「男は行ってしまった」

(16) namarawt awɲk ku-n-am-it

男 (・単) 卵 (・単) ・単・被行為者- ・単・行為者-食べる-完了

「男は卵を食べてしまった」

(17) namarawt narman na-n-tupul

男 (・単) 女 (・単) / ・単・被行為者- / ・単・行為者-叩く

「男は女を叩いた / 女は男を叩いた」

これらの例から、イマス語は能格言語であることが知られる。主語と目的語を表す名詞そのものは能格でも絶対格でもないのだが、主語と目的語を投影する動詞人称接辞が能格と絶対格とに分かれている。すなわち、他動詞文主語を標示する形態として-nが用いられ、自動詞文主語と他動詞目的語を標示する形態としてna-とku-が用いられている。しかし後者の形態、つまり絶対格を表す動詞人称接辞の形はさまざまである。人間名詞と動物名詞の場合にはもっぱらna-が用いられるが、無生名詞の場合にはいくつかの形態が使い分けられる。そしてその使い分けに無生名詞の語尾が関与している。すなわち、無生名詞の語尾の形態と無生名詞を投影する人称接辞の形態とが多くの場合一致するのである。たとえば上の(16)において、ku-という被行為者標識は目的語であるawɲkの語尾を反映した形をしている。

次に、名詞と形容詞類との一致の関係がイマス語においてどのように表されるかを説明するために以下の例を示す。

(18) ama-na-ŋ            tiriŋ            mamaki-ŋ  
       私-属-・単      齒(・単)      悪い-・単  
       「私の悪い齒」

(19) ama-na-ŋkii        triŋki            mamaki-ŋki  
       私-属-・複      齒(・複)      悪い-・複  
       「私の悪い齒」

これらは無生名詞を修飾する形容詞類の接辞が無生名詞の語尾と一致していることを示すためのものである。(18)ではtiriŋ「齒」の語尾が-ŋであるので、それを修飾する所有代名詞と形容詞の接辞も-ŋとなっている。(19)においても、修飾語と被修飾語の語尾は複数接辞の-iをも含めてほぼ完全に一致している。しかし後述するように、無生名詞の語尾と形容詞類の接辞とが常に一致するというわけではない。

さて、イマス語には 類から 類までの名詞区分がある。 類は男性人間名詞、 類は女性人間名詞、 類は動物名詞、残りは無生名詞である。無生名詞はその語尾によって 類から 類までに分かれる。そしてその語尾の形態と、名詞を修飾する形容詞の接辞の形態とが原則として一致する。また、その名詞を主語にいただく述語動詞の接辞とも基本的に一致する。フォーリー(1986:89)によれば、 類から 類までの名詞の語尾と形容詞接辞と動詞接辞との関連は以下のとおりである。なお、ここでは煩瑣をさけるため双数形と複数形における関係は取りあげない。

<表 13> イマス語の無生名詞語尾と形容詞・動詞接辞

	名詞語尾	形容詞接辞	動詞接辞
類	-um	-um	mu-
類	-p, t, k, m, n, ŋ, r, l	-n	na-
類	-ŋk	-ŋk	k-
類	-mp	-mp	p-
類	-i	-i	i-
類	-aw	-aw	wa-
類	-uk	-uŋk	ku-
類	-uŋk	-uŋk	ku-

名詞語尾と形容詞接辞は、この表に示されたのとは多少異なる形態をとることがある。たとえば、 類の名詞語尾と形容詞接辞は複数接辞などが付かなければ-ŋとなる。同様に 類では-mとなり、 類では-uŋとなるのが通例である。-kや-pは別の形態を付加

するときのいわば連結音であると見なされる。

このように考えたとき、またこのことを ~ 類と 類の形容詞接辞が-nであることを考えあわせたとき、イマス語では-nが本来の形容詞接辞であり、これがすべての名詞を修飾するときに用いられる共通の接辞であったという仮定が導かれる。そしてこの-nの前身であったと見なされる \*-na (< \*-ŋa < \*-nga < \*-ga) は、先の(14)に例示したイマス語の属格接辞あるいは所有格接辞 -na と同一物であったと想定される。つまりイマス語の属格接辞 \*-na は、先の(12)に例示したチャモ口語の na と同様に、かつては形容詞形成辞でもあったと考えられるのである。このような-nの機能は日本語の形容動詞の連体形を形成する-naの機能と属格形を形成する-noの機能を兼ねたものであることを指摘しておきたい。

形容詞接辞がもとは属格接辞であったのに対して、動詞接辞は動詞に付属した人称代名詞であった。そしてその形態は、一律に na- であった。このような判断は、 ~ 類と 類の動詞接辞が na- であること、つまり名詞語尾による音声的制約を受けない中立的な条件のもとで使用される接辞がおしなべて na- であるという事実に依拠している。ところで、動詞接辞 na- の起源は、具格接辞としての \*-ga に求めることができる。すなわち na- は、具格接辞 \*-ga から生まれた能格の動詞接辞(すなわち他動詞文における主語標識)が絶対格の動詞接辞(すなわち自動詞文の主語標識と他動詞目的語標識)に転用されたものであろう。現在の能格接辞 n- の前身は、したがって、\*-na- であったにちがいない。

さて、イマス語の形容詞接辞と動詞接辞がかつては一律の形態を有していたとして、それが今では<表13>に示したような状態になってしまったのはなぜだろうか。その変化にはもちろん、名詞語尾が作用している。名詞語尾の形態と形容詞・動詞接辞の形態とが多くの場合に重なりあうのは偶然の一致ではありえない。名詞語尾のすべてではないにしろ、かなりのものが形容詞・動詞接辞の中に取りこまれたのは明らかである。ここで重要なことは、形容詞・動詞接辞として取りこまれなかった名詞語尾も存在するということである。筆者が推測するに、取りこむための受け皿があった名詞語尾は取りこまれ、そういう受け皿がなかった名詞は取りこまれなかった。そして、その受け皿となったのは \*-ga、\*-ti、\*-ma の反映形である。すなわち、\*-ga、\*-ti、\*-ma の反映形と形態的に類似した語尾を有する無生名詞をそれら反映形でもって指示するとともに、無生名詞語尾を多くの場合にそのまま形容詞接辞とする体系が生まれたのではないかと思われる。

<表13>に示した動詞接辞が、na- 以外もすべて \*-ga、\*-ti、\*-ma の反映形と見なしうることを、以下の<表14>を参照しながら確認しておこう。

<表 14> イマス語の人間を表す動詞人称接辞<sup>9</sup>

		他動詞文主語	自動詞文主語	他動詞目的語
1 人称	単数	ka-	ama-	ŋa-
	双数	ŋkra-	kapa-	ŋkra-
	複数	kay-	ipa-	kra-
2 人称	単数	n-	m-	nan-
	双数	ŋkran-	kapwa-	ŋkul-
	複数	nan-	ipwa-	kul-
3 人称	単数	n-	na-	na-
	双数	mpi-	impa-	impa-
	複数	mpu-	pu-	pu-

<表 13>における 類の mu- が \*-ma の反映形、 類の k- と、 類および 類の ku- が \*-ga の反映形、 類の i- が \*-ti の反映形であることは、<表 14> を参照するまでもなく明らかである。これに対して 類の p- に関しては、その祖形を即座に判断することができない。しかし 類の形容詞接辞が -mp となっていることから類推して、また<表 14> の 3 人称に impa- や mpu- という形が見られることからして、p- は mp- が変化したものであると判断される。そして、mp- の前身は m- であり、m- はさらに \*-ma に遡るものであると考えられる。同様に、<表 14> に示した 3 人称複数形の pu- も \*-ma の反映形であると見なされよう。ところで、その祖形を推量することしかできないのは 類の wa- についても同じであるが、これは<表 14> に 2 人称の双数 kapwa- と複数 ipwa- における -wa と同様、\*-ga > \*- a > \*-?a という変化を経て成立したものであろう。なお筆者の考えでは、アイヌ語の尊格接辞 -wa 「～から」や北米インディアン諸語の一つであるダコタ語の 1 人称代名詞活格 wa や日本語の話題標識 -wa も、その起源は \*-ga である。

以上のように、イマス語の形容詞接辞は属格接辞に、動詞接辞は具格接辞にその起源を求めることができる。そして、無生名詞の語尾を多くの場合にそのまま形容詞接辞とする方法は、名詞語尾と動詞語尾との対応関係が生まれた後になって、名詞分類のシステムを強化するために確立したものであると推察される。

### 3 オーストラリア原住民諸語

オランダ人やイギリス人が到来する以前のオーストラリア大陸には、約30万人の原住民が約600の部族を構成して、それぞれが独自の言語をもっていたという。角田(1988)は、それらオーストラリア原住民諸語間の系統関係、およびオーストラリア原住民諸語とオーストラリア大陸外の諸言語との関係を以下のように述べている。

厳密な方法での証明はなされていないが、オーストラリア諸語が、1つの語族を形成するという説が提出されている。音韻、文法、語彙の点で、かなりの共通点や類似点があるので、1つの語族である可能性はかなり高いと思われる。タスマニア諸語にも類似点が少しあり、同系統の可能性も指摘されている。このほかに、パプア・ニューギニアの諸言語、インドネシアの諸言語、ドラヴィダ語族との系統的關係も論じられたことはあるが、これは憶測にすぎない。(992頁)

オーストラリア原住民は、東南アジア方面から現在のニューギニア島を経て陸路でオーストラリアに移って来た人々の子孫である。原住民は少なくとも4万年前にはオーストラリア大陸に住みついていたというから、人類のオーストラリアへの移動はニューギニアへの移動と時期が大体において一致している。そこで、同一言語ではないにしても、同系言語を話す人々がオーストラリアとニューギニアに移り住むようになったのではないかという考えが自然に浮かぶ。本節は、この考えが的はずれではないことを憶測ではない形で論証しようとするものである。

### 3.1 人称標識

オーストラリア原住民諸語の人称標識はパプア諸語のそれとよく似ている。しかし、このことは案外と知られていない。むしろ、そのことに今まで誰ひとりとして注目してこなかったと言うほうがあまっている。以下の<表15>と<表16>はオーストラリア原住民諸語の中のパマ・ニュンガン語群に属するワルング語とジャル語における人称代名詞の単数形だけを示したものであるが、これを見ただけでも、オーストラリア原住民諸語が外部の諸言語から隔絶されたものではないことが直感される。そして二つの表を先の<表7>と見比べたとき、オーストラリア原住民諸語とパプア諸語とのつながりは否定し難いものとなる。そしてオーストラリア原住民が数万年にわたって外部との交渉をもたずに孤立状態にあったことを考えたとき、そのつながりは系統的なものであると結論せざるをえなくなる。

<表15> ワルング語の人称代名詞<sup>10</sup>

	主格	属格	対格
1人称	ngaya	ngayku	nganya
2人称	yinta	yinu	yina
3人称	nyula	nyungu	nyunya

<表16> ジャル語の人称代名詞<sup>11</sup>

	絶対格	能格	与格
1人称	ngatyu	ngatyungku	nganinga
2人称	nyuntu	nyuntuku	nyununga
3人称	nyantu	nyantuku	nyanunga

上の二つの表を示したのはワルング語とジャル語の人称代名詞が体系的に異なることを説明するためではなく、人称代名詞を構成する要素がパプア諸語におけるのと基本的に変わらないことを指摘するためである。したがって、ここには人称代名詞の一部の格形しか示されていない。ちなみに、ワルング語もジャル語も能格言語であるが、ワルング語の人称代名詞には3人称の双数と複数にのみ能格が認められる。一方、ジャル語には付属代名詞 (bound pronoun) の1・2人称と3人称双数・複数に対格が認められるだけで、自由代名詞 (free pronoun) にも名詞にも対格は存在しない。また、ジャル語の人称代名詞には属格も存在しない。なお、<表15>と<表16>に示された形態はすべて自由代名詞である。

さて、<表15>と<表16>を先の<表7>と比べてすぐに気づくのは、ワルング語の1人称単数主格ngayaがカマノ・ナガリア語の1人称単数na(gaya)と形態が酷似していることである。この類似性はしかし、共通の祖語の段階から存在したものはあるまい。ngayaとna(gaya)はワルング語とカマノ・ナガリア語の歴史の中でそれぞれ独自に形成されたものであろう。重要なことは、それら2語の形態的類似性がまったくの偶然によるものではなく、なにがしかの必然性を有するということである。つまり、ngayaとna(gaya)が結果的に類似した形態となったのは、格標識\*-ga、\*-ti、\*-maの反映形によって人称標識を形成するという原理が両言語に存在したからである。言うまでもなく、これはジャル語との間でも共通の原理であった。ジャル語とワルング語は千キロメートル以上も離れた地域の言語である。直線距離で言えば、ジャル語とワルング語とはジャル語とカヤノ・ナガリア語ほどにかけ離れている。このような2言語間の人称代名詞が類似しているのは、2言語間に言語接触があったからではなく、人称代名詞の形成原理が2言語間で同じであったからにちがいない。なお、<表14>と<表15>には\*-maの反映形と見なされる形態が含まれていないけれども、たとえばジャル語の1人称複数包含形の絶対格にngalipa、1人称複数排除形の絶対格のnganimpaという形が存在する。どうやらオーストラリア原住民諸語でも\*-maは多くの場合に-pあるいは-mpという形になったようである。

ここで付属代名詞のことにも触れておきたい。まずはじめに、ジャル語における付属代名詞の主格・対格・与格・所格単数形のみを下の<表17>に示してみる。

<表17> ジャル語の付属代名詞<sup>12</sup>

	主格	対格	与格	所格
1人称	-ma	-yi など	-yi など	-yila など
2人称	-n など	-ngku	-ngku	-ngkula
3人称	-∅ (ゼロ)	-∅ (ゼロ)	-la	-lanynta

ジャル語の付属代名詞は自由代名詞と違って主格型の組織を有するが、その起源は自由代名詞と同様に \*-ga、\*-ti \*-ma である。1人称主語の -rna における -na (< \*-ŋa < \*-nga < \*-ga) は言うまでもなく、-r も \*-ga に遡る。-r は \*-ga > \*- a を経由した形であろう。同様に、3人称与格や1・2・3人称所格に見られる -la という形態もその前身は \*- a であつたらう。2人称の対格と与格の -ngku は \*-ga に由来する -ng (< \*-nga < \*-ga) と -ku (< \*-gu < \*-ga) とが合わさったものであると考えられる。\*-ti と \*-ma もジャル語の付属代名詞の形成にかかわっている。\*-ti の反映形は1人称の -yi や3人称所格 -lanynta に見られる。また、\*-ma の反映形は <表17> には示されていないが、たとえば1人称複数排除形の対格 -nganimpa などに見られる。

さて付属代名詞に関してここで特別に注目したいのは、付属代名詞が付属する語あるいは形態である。

- (20) nyangula-n            yan-i  
       いつ-あなた(主)    行く-過去  
       「あなたはいつ行ったか」
- (21) wa-n                    nya-nya  
       疑問-あなた(主)    見る-過去  
       「あなたは私を見たか」
- (22) ngatyu    nga-rna            mawum  
       私(絶)    視点-私(主)    男(絶)  
       「私は男である」

付属代名詞の使用は義務的ではないが、それを用いるには上の(20)や(21)におけるように疑問詞や疑問標識などに付属させなければならない。しかし付属させるべき語が文中に存在しない場合、(22)におけるように nga- という形態を付属代名詞の前に置かなければならない。一般に運搬詞(carrier)と呼ばれるこの nga- は \*-ga に遡るもののように思われる。そしてこの nga- は、付属代名詞に宿を貸す役目を担っているなどとも言われるが、筆者の考えでは一種の視点標識としての役割を果たしている。このことをオーストロネシア語族のヤミ語やパプア諸語の中の一つであるパライ語を引き合いに出して説明してみよう。

すでに述べたように、ヤミ語には \*-ga に由来する o という視点標識がある。この o は、ンガダ語の nga[ŋa] やトンガ語の ko やサモア語の ?o などと同様に、日本語で「私ね」「犬にな」「魚をさ」などと言うときの「ね」「な」「さ」のような働きをする。日本語ではこの種の助詞を一つの文にいくつも使用できるが、ヤミ語の o は文中の1箇所にしか使用できない。すなわち o は、行為者・被行為者・道具・受益者・場所を表す名詞のいず



れか一つとだけ共起することができる。

さて、ンガダ語の nga やヤミ語の o やトンガ語の ko に相当するパライ語の形態は、-ka (< \*-ga) である。フォーリー (1986: 124-125) はこの -ka が文中の特定の名詞に卓立 (prominence) を与える機能を果たすとしたうえで、それに 'really' という副詞的意味を付与している。しかし筆者の考えでは、-ka は聞き手の注目を引くためのものであって、文中のもっとも重要な情報、すなわち焦点を標示するためのものではない。したがって、パライ語の -ka も視点標識と呼ぶのがふさわしいと考える。

パライ語は視点標識をもつという点においてパプア諸語の中では特異な存在ではあるが、視点標識の現れ方もまた特異である。パライ語の視点標識はヤミ語などにおけるよりもはるかに限られた場にしか現れない。このことをフォーリーから引用した以下の例文によって確認する。

- (23) fu-ka     na   kan-ie  
       彼-視点 私 叩く-1・単・被行為者  
       「彼が私を叩いた」

- (24) \*fu   na-ka     kan-ie  
       彼 私-視点 叩く-1・単・被行為者  
       「彼が私を叩いた」

上の(23)は、行為者が視点化されているので、「彼が<sup>ね</sup>私を叩いた」「彼は<sup>ね</sup>私を叩いた」といった意味を表す。一方、(24)は「彼が私を<sup>ね</sup>叩いた」「彼は私を<sup>ね</sup>叩いた」といった意味を表そうとしたものであるが、非文である。パライ語では、主語が有生名詞である場合に主語以外の要素を視点化することはできないのである。しかし無生名詞が主語になると、以下のように事情が異なる。

- (25) ije     na-ka     visi-nam-ie  
       それ 私-視点 気持ち悪い-他動詞化-1・単・被行為者  
       「それが私を気持ち悪くさせた」

- (26) \*ije-ka     na   visi-nam-ie  
       それ-視点 私 気持ち悪い-他動詞化-1・単・被行為者  
       「それが私を気持ち悪くさせた」

このように主語が無生名詞で目的語が有生名詞である場合、目的語が視点化される。主語を視点化しようとする非文が生まれる。パライ語では、「それが私を<sup>ね</sup>気持ち悪くさせた」のようには言うが、「それが<sup>ね</sup>私を気持ち悪くさせた」のようには言わないのである。

さて問題はジャル語の nga- である。nga- は視点標識ではあるけれども、ヤミ語の視点

標識oともバライ語の視点標識-kaとも役割が異なっているように思われる。このことを先の(22)と以下の(27)~(30)の例に即して説明する。

- (27) ngatyungku nga-rna-ngku nyuntu nya-nya  
私(能) 視点-私(主)-あなた(対) あなた(絶) 見る-過去  
「私が見た」
- (28) ngatyungku nga-rna-∅ nyantu nya-nya  
私(能) 視点-私(主)-彼(対) 彼(絶) 見る-過去  
「私が見た」
- (29) nyantuku nga-∅-ngku nyuntu nya-nya  
彼(能) 視点-彼(主)-あなた(対) あなた(絶) 見る-過去  
「彼が見た」
- (30) \*murrkun-tu nga-∅-∅ nyantu nya-nya  
男-能 視点-彼(主)-彼(対) 彼(絶) 見る-過去  
「男が見た」

ジャル語のnga-は聞き手の注意を喚起するための装置である。この点は、ヤミ語のoやバライ語の-kaの場合と異ならない。問題は何に対して注意を喚起するかである。ヤミ語では行為者・被行為者・道具・受益者・場所のいずれかに聞き手の注意を引かせる。一方、バライ語では原則として行為者に注目させる。これに対してジャル語では、主語や目的語の人称・数・格が注目の的となる。たとえば(22)の自動詞文では、主語が「私」であることを念押ししている。(27)では行為者が「私」で被行為者が「あなた」であることを明示している。(28)では行為者の「私」は明示されているが、被行為者はゼロ形態によって3人称単数であることが暗示されている。同様に(29)では、行為者はゼロ形態によって3人称単数であることが暗示され、被行為者は-ngkuによって「あなた」であることが明示されている。一方、(30)ではnga-に先導される付随代名詞が行為者・被行為者ともにゼロ形態となっているが、角田(1988: 1015)によると、このような文はジャル語の西方言では非文であるという。

以上のように、ジャル語のnga-は文を構成する諸要素間の文法的関係を聞き手に把握させるための、いわば注目要求接辞である。\*-gaの反映形と考えられるジャル語のnga-が同じ\*-gaの反映形であると考えられるヤミ語のoやバライ語の-kaと本質的に同じ機能を有するという事実もまた、これらの言語が系統的につながっているという主張を裏付ける証拠の一つとなろう。

### 3.2 格標識

オーストラリア原住民諸語の格標識は、少なくともパマ・ニュンガン語群の中では非

常によく似ているという。典型的な格標識と言っているものを角田(1988:1002)に従って示してみよう。

絶対格: -∅(ゼロ)

能格: 母音の後では -ngku または -lu

子音または半母音 y の後では -Du (D は直前の音素に同化する破裂音)

属格: -ngu または -nga

与格: -ku (ジャル語やワルング語では -wu)

対格: -nya または -nha (主として代名詞に付く接辞)

所格: 母音の後では -ngka または -la

子音または半母音 y の後では -Da (D は直前の音素に同化する破裂音)

具格: 多くの言語で能格と同一、一部の言語で所格と同一

上に示した形態の多くは \*-ga の反映形と見なしうる。-ngu、-nga、-nya、-nha は単純な音声変化を通じて \*-ga が変形したものである。能格接辞の -lu と所格接辞の -la も、\*-ga が \*-u あるいは \*-a を経て生まれたものと考えられる。また能格接辞の -ngku と所格接辞の -ngka は、-ng (< -nga < \*-ga) と -ku (< \*-ga) あるいは -ka (< \*-ga) とによって合成されたものに相違ない。一方、能格接辞の -Du と所格接辞の -Da は、直前の音素に同化して -du、-tu、-tyu、-ru、-yu、あるいは -da、-ta、-tya、-ra、-ya などとなるが、これらのうちの少なくとも -du、-tu、-tyu、-da、-ta、-tya などの形は \*-ti に遡るものである。一方、-ru、-yu、-ra、-ya などは -du、-tu や -da、-ta が直前の音素と同化したもの、すなわち \*-ti を継承したものであるのか、それとも \*-ga が \*-u や \*-a を經由して生まれたものであるのか判断できない。しかしいずれにせよ、オーストラリア原住民諸語のパマ・ニュンガン語群における格標識はその多くが \*-ga の反映形で、その一部が \*-ti の反映形であると結論づけてよさそうである。

ここで属格接辞のことについて若干補足しておきたい。オーストラリア原住民諸語の属格は比較的未発達である。ジャル語のように属格というカテゴリーが存在しない言語も存在するが、そのような言語では所有を表すのに与格構文が用いられるという。このことに関して指摘しておかねばならないのは、名詞を修飾する形容詞に属格接辞が付かないということである。前述したように、オーストロネシア語族のチャモロ語では属格接辞 \*-ga の反映形である na が形容詞に付属する。また前述したように、パプア諸語のイマス語では同じ \*-ga に由来する -na が本来の形容詞接辞であったと想定される。これに対してオーストラリア諸語のたとえばワルング語では、形容詞接辞は名詞に付される接辞と格が一致する。

- (31) tyarripara-ngku pama-ngku kuypinpa manytya-ngku kuypa-n  
 善良な-能 男-能 若者(絶) 食べ物-具 与える-過去/現在  
 「善良な男が若者に食べ物を与えた」

このワルング語の例において、他動詞文主語の pama-ngku 「男」は当然のことながら能格である。そしてこの主語を修飾する tyarripara-ngku 「善良な」も能格となっている。このような格の一致がどのようにして成り立ったかと言えば、これもつきつめれば、形容詞と名詞との仕切りが明確でなかったことに由来するものである。これを(31)に即して説明すると、次のようになる。tyarripara 「善良な」という形容詞は、名詞として「善良な人・もの・こと」を意味することもできる。そこで tyarripara-ngku pama-ngku は本来、「善良なものが-男が」という並列構造であり、これが「善良な-男が」という修飾・被修飾構造に転換したものと考えられる。ワルング語などにおけるこのような修飾関係は、たとえばチャモロ語における形容詞と名詞との修飾関係、あるいは日本語における形容動詞の連体形と名詞との修飾関係が「善良の-男が」といったような属格表現に根ざしたものであるのとは対照的である。

### 3.3 自動詞化接辞と他動詞化接辞

アジア太平洋諸語が同じ系統樹を構成するという考えを補強する一つの手立てとして、自動詞や他動詞を形成する接辞の同系性を確かめる方法がある。そのような接辞が複数の言語間で一致していたら、それらの言語が同一の祖語に遡るという判断を躊躇なく下すことができよう。というのも、自動詞化接辞や他動詞化接辞のような文法装置が他言語から借用されるということは普通にはありえないことのように思われるからである。

ここでの目的は二つある。一つは、オーストラリア原住民諸語の中のワルング語とイディン語に見られる自動詞化接辞と他動詞化接辞が具格接辞に由来するものであることを指摘することである。もう一つは、同種の接辞がオーストラリア大陸外の諸言語にも存在することを指摘することによってオーストラリア原住民諸語とそれらの言語との系統的関連性を示す証拠をさらに追加することである。

最初に、イディン語における自動詞化接辞の例をディクソン(1977)から引用する。

- (32) yiŋu bana gaɖu:l-daga-ŋ  
 この 水 汚い-自動詞化-現在  
 「この水は汚くなってきている」

- (33) yiŋu gumba mura:nɖi-daga-ŋ  
 この 少女 病気の-自動詞化-現在  
 「この少女は病気にかかっている」

これらは -daga-n という自動詞化接辞が形容詞に付属している例である。-daga-n の -n が

消えているのは、それが時制接辞の-ŋと同化しているからである。次に、他動詞化接辞の-ŋa-lが形容詞に付属した例をあげる。

- (34) ŋayu yinŋ bana gaɖula-ŋa:l  
私(主) この 水 汚い-他動詞化  
「私がこの水を汚した」

- (35) ŋayu yinŋ bulmba bala:-ŋal  
私(主) この 家(絶) あいている-他動詞化  
「私がこの家(の扉・壁)をあけてやる」

ディクソンによると、イディン語には自動詞化接辞として-madi-n、他動詞化接辞として-luŋa-lという形態も存在する。しかしこれらは上に例示した-daga-nや-ŋa-lとは違って生産的な接辞ではないという。ところで、ワルング語の自動詞化接辞は-piであり、他動詞化接辞は-ngaである。これらもイディン語の-daga-nや-ŋa-lと基本的に同じ働きをするようであるが、下に他動詞化接辞の-ngaが名詞に付属した例を角田(1988)から引用してみよう。

- (36) pama-ngku warrngu kuwuy-nga-n  
男-能 女(絶) 死人-他動詞化-過去/現在  
「男が女を死人にした(すなわち、殺した)」

- (37) pama-ngku yalka-nga-n  
男-能 道-他動詞化-過去/現在  
「男たちが道をつくった」

さて、上に示した自動詞化接辞と他動詞化接辞が具格起源であると判断する第一の根拠として指摘しなければならないのは、それらが\*-ga、\*-ti、\*-maの反映形として説明可能だということである。イディン語の-daga-nは、\*-ti > \*-taという変化を経由した-daと、\*-gaを継承した-gaと、\*-gaが\*-ngaや\*-ŋaなどを経て生まれた-nとが合わさったものと考えられる。-na-lは、\*-gaが\*-ŋaなどを経由してできた-naと、\*-gaが\*-a > \*-laという変化を経由した-lとが組み合わさったものとして説明できる。また-madi-nの場合には\*-maと\*-tiと\*-gaの反映形の組み合わせとして、-luŋa-lの場合には\*-gaの反映形が三つ重なったものとして説明できる。同様にワルング語の場合にも、自動詞化接辞の-piは\*-ma > \*-m > \*-mpという変化を経て生まれた-pと\*-tiの反映形である-iとが合体したものとして説明できるし、他動詞化接辞の-ngaは\*-gaの反映形であると容易に見なしうる。

第二に指摘しなければならないのは、イディン語の自動詞化接辞-daga-n、-maɖi-nと他動詞化接辞-ŋa-l、-luŋa-lの構成素がイディン語の具格接辞とかなりの程度に一致する

ということである。たとえば、イディン語では-da、-qi、-laなどが具格接辞として実際に用いられる。またイディン語では-muや-mが奪格と原因格の接辞であるが、原因格は具格の一種であると言えなくもない。さらにイディン語では、-qiと-ŋa-lとが合わさった-diq̄a-lが動詞に付属して、以下のように具格接辞として用いられる。

(38) waguda-ŋu    d̄ugi            bunda: -diq̄a:l    gangula-nda  
 男-能            棒(絶)    叩く-具            ワラビー-与  
 「男が棒でワラビーを叩いた」

自動詞化接辞と他動詞化接辞が具格接辞から成ったものであるとして、具格接辞は何ゆえにそのような接辞になりえたかという疑問に答えなければならない。筆者の考えるところ、自動詞化接辞の形成には省略と含意という問題がかかわっている。このことを(32)の例に即して説明してみよう。(32)の述語動詞gaḍu:l-daga-ŋは「汚くなってきている」を意味するが、その本来の意味は「～で汚い」であった。しかし接辞の-daga-n「～で」は、たとえば(38)の述語動詞bunda: -diq̄a:l「～で叩く」の接辞-diq̄a:l「～で」がdugi「棒」という先行名詞と密接にかかわっているのとは対照的に、かかわるべき先行名詞をもたなかった。正確に言うと、そのような名詞が省略され、含意されていたのである。ところが、省略されていることがやがて忘れられた。そのために、「～で汚い」という意味が変質した。具格的意味が「なっている」という動詞の意味に変わったのである。

具格的意味から動詞の意味がなぜ生じたかを、もう少し具体的に「この水は汚い」と「この水は泥で汚い」とを比較することによって考えてみよう。「この水は汚い」というのは、「水の汚さ」をいわば静的なものとして捉えた表現である。これに対して「この水は泥で汚い」というのは、「水の汚さ」をいくぶん動的なものとして捉えた表現、つまり変化を内包した表現である。「泥が混じったから、この水は汚くなった」という意味合いが感じられなくもないからである。そこで「この水は泥で汚い」という表現自体、「この水は泥で汚れている」とか「この水は泥で汚くなっている」というふうに動詞を用いた表現に換えた方が自然である。このように具格表現が変化を内包するものであるからこそ、-daga-nは具格接辞から「なる」という意味の自動詞化接辞になったのである。

次に、具格接辞が他方において「する」という意味の他動詞化接辞になった理由を(34)の例に即して考えてみよう。(34)はもともと自動詞文であり、その述語動詞gaḍula-ŋa:lはやはり「～で汚い」という意味を表した。そして、具格接辞であった-ŋa:lはŋayu「私」と結び付いていた。つまり(34)は本来、「私のせいでこの水は汚い」という意味を表した。しかし(34)は、具格副詞であったŋayu「私」が他動詞文主語となり、自動詞文主語であった絶対格のyiq̄u bana「この水」が他動詞目的語になること

によって他動詞文化した。すなわち、具格接辞が「する」を意味する他動詞化接辞となり、(34)は「私がこの水を汚くした」という意味を表すようになったのである。なお、上の(37)におけるように他動詞化接辞が「つくる」という意味を表す用法は、(36)のような用法から派生したもののように思われる。

最後に、オーストラリア大陸外のアジア太平洋諸語における自動詞化接辞と他動詞化接辞もやはり具格接辞に由来するものであることを、北米インディアン語のいくつかを含む諸言語について筆者が作成した以下の1)~17)の資料に基づいて確認する。

1) ムラコ語

他動詞化接辞：-kan、-i

受動化接辞：di-

2) ヤップ語

他動詞化接辞：-si、-ha'ini<sup>13</sup>

受動化接辞：-ha'i

3) ポナベ語

自動詞化・受動化接辞：ka-

他動詞化接辞：ka- + -ih など<sup>14</sup>

4) コシヤエ語

他動詞化接辞：-kihn

使役化接辞：ahk-

受動化接辞：-yuhk

5) ビルマ語

他動詞化接辞：-h、h-

使役化接辞：-sei、-zei、t-

6) オナー・モンパ語

他動詞化接辞：-h

使役化接辞：-tho

7) ソロン語

他動詞化・受動化接辞：-wu ~ -(g)uu

使役化接辞：-uuxaan

8) 満州語

他動詞化・使役化・受動化接辞：-bu

9) 朝鮮語

自動詞化・他動詞化・受動化接辞：-i、-hi、-ri、-ki、-č'u、-ku、-u

使役化接辞：-ge<sup>15</sup>

10) モンゴル語文語

他動詞化接辞：-ga、-ge、-qa、-ke

受動化接辞：-gda、-gde、-da、-ta

使役化接辞：-gul<sup>16</sup>、-qagul

11) アイヌ語

自動詞化接辞：-ke、-pa、-(i)n、-(i)p<sup>17</sup>

他動詞化接辞：-ke、-ka、-re、-te<sup>18</sup>、-a、-i、-u、-e、-o

使役化接辞：-re、-e<sup>19</sup>、-te、-yar、-ar

12) トルコ語

自動詞化・他動詞化接辞：-la/-len/-let/-leş/-(a)l/-ar/-sa/-a + -mek/-mak<sup>20</sup>

他動詞化・使役化接辞：-tir、-dir、-ter、-zir、-t、-it、-ir、-ar、-ur、-ür、-er

受動化接辞：-ül

13) トリングット語

他動詞化・使役化接辞：ka-、-x

受動化接辞：wu-

14) マイドゥ語

他動詞化・使役化接辞：-ti

15) クース語

自動詞化接辞：-aai

他動詞化接辞：-t、-ts

使役化接辞：-iyat

16) フォックス語

他動詞化接辞：-m、-t、-h、-hw、-w<sup>21</sup>

受動化接辞：-g(u)

17) タケルマ語

自動詞化接辞：-x

他動詞化・使役化接辞：-(a)n

受動化接辞：-(a)n、-(a)na<sup>e</sup>、-am

上の1)~17)に示した資料は大体において過去の文献に依拠したものであるが、他動詞化接辞と使役化接辞は筆者独自の基準に従った区別である。すなわち、他動詞化接辞とは自動詞・形容詞・名詞を他動詞に変換する接辞のことであり、これには「人に・を~せる・させる」という意味を表す場合の接辞を含めない。そして、この「人に・を



～せる・させる」という意味を表す場合の接辞のみを使役化接辞と見なしている。このような分類基準に従うと、たとえば「沈む」「沈める」<sub>レ</sub>「出る」「出す」<sub>レ</sub>「落ちる」「落とす」<sub>レ</sub>「過ぎる」「過ごす」などは自動詞の他動詞化の例であり、たとえば「行く」「行かせる」<sub>レ</sub>「寝る」「寝かせる」<sub>レ</sub>「知る」「知らせる」<sub>レ</sub>「聞く」「聞かせる」<sub>レ</sub>「見る」「見せる」などは自動詞・他動詞の使役化の例ということになる。

筆者の定義では、他動詞化接辞と使役化接辞は機能がはっきりと異なる接辞である。したがって、両者は明確に区別することができる。言語によっては他動詞化接辞と使役化接辞とが同形であるけれども、それらが実際に使われている文を見れば、いずれの接辞であるかを容易に分別できる。これに対して、自動詞化接辞と受動化接辞はしばしば見分けがつかない。たとえば朝鮮語の-iは、明確な使役化接辞として *čuk-da*「死ぬ」*čuk-i-da*「死なす・殺す」のように用いられたり、明確な受動化接辞として *sok-da*「欺く」*so-i-da*「欺かれる」<sub>レ</sub> *bag-da*「打ちこむ」*bag-i-da*「打ちこまれる」のように用いられたりする一方で、*čap-da*「捕える」*čap-i-da*「捕えられる・捕まる」のように自動詞化接辞とも受動化接辞とも受け取れるような使われ方をする。*bo-da*「見る」*bo-i-da*「見せる・見られる・見える」の場合にも、-iは明確な使役化接辞としての機能を有する一方で、自動詞化・受動化接辞のいずれとも決めがたいような役割を果たしている。自動詞化接辞と受動化接辞とは、その境界がそもそも曖昧なようである。

それにしても、同じ-iが一方において他動詞化・使役化接辞であり、他方において自動詞化・受動化接辞であるのはなぜだろうか。これは考えてみる価値がある。ソロン語や満州語などのツングース諸語においても他動詞化接辞と受動化接辞とが基本的に同形であるという事実から判断して、それが偶然の一致によるものとは考えられない。

上述のように、ジャル語の他動詞化接辞はもともと具格接辞であった。その具格接辞と結びついて副詞的役割を果たしていた先行名詞が他動詞文主語となり、自動詞文主語であったものが他動詞目的語となった。こうして、たとえば「彼のせいで枝が折れた」という意味の自動詞文が「彼が枝を折った」という意味の他動詞文になった。一方、「彼のせいで彼女は死んだ」という意味の自動詞文は、「彼が彼女を死なせた」という意味の使役文になった。また、「彼が彼女を使って枝を折った」といった意味の他動詞文も、「彼が彼女に枝を折らせた」のような使役文になった。その結果、動詞に付属して「～のせいで」「～を使って」という意味を表していた具格接辞が他動詞化接辞あるいは使役化接辞として解釈されるようになったのである。もちろん、このような再解釈(restructuring)が生じたのは具格接辞がまさに接辞として動詞に付着していたからである。仮に具格標識が、たとえば *He casts out demons by Be-el'ze-bul, the prince of demons (Luke 11.4)* )におけるように動詞から分離していたら、それが他動詞化接辞や使役化接辞

に再解釈されることはありえなかった。

ところで、動詞に付属した具格接辞と結びついた副詞的な名詞がすべて主語に転じたわけではない。無生名詞は原則として副詞的なままであった。有生名詞も場合によっては副詞的なものとしてとどまった。しかし有生名詞が副詞的な機能をとどめた場合、動詞に付属した具格接辞は本来の機能を失い別のものになった。すなわち、たとえば「彼のせいで彼女は死んだ」という意味の文が一方において「彼女は彼に殺された」という受動文に解釈されることによってそれは受動化接辞としての機能を有するに至った。ツングース諸語や朝鮮語において他動詞化接辞と受動化接辞が基本的に同形であるのは、実際、それらが同じ具格接辞であったことによる。二つの接辞がたとえ同形でなくても、それらがいずれも具格接辞に由来するものであることに変わりはない。このように断言するのは、上の1)～17)にあげた形態をすべて \*-ga、\*-ti、\*-maの反映形、あるいはその組み合わせと見なすことができるからである。

#### 注

- 1 土田(1992)、森口(1980)を参照した。筆者の言う視点を土田は主格と呼び、森口は主題と呼んでいる。また筆者の言う属格・具格・主格を土田は属格・行為者格、森口は属格としている。
- 2 土田(1992)、森口(1980)を参照した。土田は、人称代名詞の場合と同様、視点を主格と呼び、属格・具格・主格を属格・行為者格と呼ぶ。一方、森口は視点を行為者格とし、属格・具格・主格を具格としている。
- 3 森口(1980)に採録されているテキストから引用した。以下の二つの伝説についても同様である。
- 4 リー(1975)、杉田(1988)に依拠した。
- 5 トッピング(1969、1973)、杉田(1989)に依拠した。
- 6 フォーリー(1986:73)から引用した。
- 7 フォーリー(1986:259)から引用した。
- 8 タムラ(1995)を参照した。
- 9 フォーリー(1986)に基づいて筆者が整理したもの。なお、フォーリーはこれらの形態を人称代名詞としている。
- 10 角田(1988:998)から引用した。
- 11 角田(1988:1003)から引用した。
- 12 角田(1988:1004)から引用した。
- 13 horo「回る」 hurosi「～の周りを回る」、huroha'i「かき回される」 huroha'ini「(道具)でかき回す」のように使い分けられる。
- 14 tikitik「小さい」 ka-tikitik「小さくされる・小さくなる」 ka-tikitik-ih「小さくする」のように用いられる。
- 15 ga-da「行く」 ga-ge-hada「行かせる」のように語尾が-hadaになる。この-hadaの-ha( <

- \*-ga) も本来は使役接辞であったと考えられる。
- 16 -gūl は具格接辞 -gār と明らかに同源である。なお、現代モンゴル語の -(g)ūl という接辞は tab-ūl 「5人で」のように共同の行為者を表すが、これも具格接辞に由来するものである。
- 17 -pa, -(i)p は主語が複数のときに用いられる。
- 18 他動詞化接辞の -te は主語が複数のときに用いられる。使役化接辞の -te はさにあらず。
- 19 使役化接辞の -e は -r の後でのみ用いられるので、-re と同源であると考えられる。
- 20 kir 「汚れ」 + let-mek kirletmek 「汚す」、kara 「黒い」 + ar-mak kararmak 「黒くなる」のように、名詞や形容詞を自動詞あるいは他動詞に換える。
- 21 m は目的語が有生名詞の場合、-t は目的語が無生名詞の場合に用いられる。また -h, -hw, -w は具格的意味を含意する。(ジョーンズ、1911 : 807 809, 842 843)

### 引用文献

- グリーンバーグ Greenberg, Joseph H. (1963), Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of language*, 73-113. 2<sup>nd</sup> edition, 1966. Cambridge: MIT Press.
- 近藤健二(1998), 「分裂能格の諸相(1)」『ことばの科学』(名古屋大学言語文化部)第11号:5-31.  
(1999), 「能格的なものの発展をめぐって(7)」『言語文化論集』(名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科)第11巻第1号:53-67.
- ジョーンズ Jones, William (1911), Algonquian (Fox). In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian languages*. part 1: 735-873. Washington: Government Printing Office.
- 杉田 洋(1988), 「コシャエ語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第1巻:1682-1690. 三省堂.  
(1989), 「チャモロ語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第2巻:857-863. 三省堂.
- Tamura, Kenichi (1995), The case suffix ci in Sibe-Manchu texts. 『名城商学』(名城大学商学会)第44巻別冊:35-51.
- 土田 滋(1992), 「ヤミ語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第4巻:566-571. 三省堂.
- 角田太作(1988), 「オーストラリア原住民諸語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第1巻:992-1031. 三省堂.
- ディクソン Dixon, R.M.W. (1977), *A grammar of Yidjñ*. Cambridge: Cambridge University Press.
- トッピング Topping, Donald M. (1969), *Spoken Chamorro*. Honolulu: The University of Hawaii Press.  
(1973), *Chamorro Reference Grammar*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- フォーリー Foley, William A. (1986), *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森口恒一(1980), 「ヤミ語」黒潮文化の会(編)『黒潮の民族・文化・言語』308-386. 角川書店.
- リー Lee, Kee-dong (1975), *Kusaien Reference Grammar*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- ワーム Wurm, S.A. (ed.) (1975), *New Guinea area languages and language study, vol.1: Papuan languages and the New Guinea linguistic scene. Pacific Linguistics*, C38.  
(1982), *The Papuan languages of Oceania. Acta Linguistica 7*. Tübingen: Gunter Narr.

